アキヒト皇太子・天皇のフィリピン訪問

―『グローバル化する靖国問題―東南アジアからの問い』補論―

早 瀬 晋 三[†]

The Visit to the Philippines by Akihito as the Crown Prince in 1962 and as the Emperor of Japan in 2016

Shinzo Hayase

In the English-language newspapers of ASEAN（Association of Southeast Asian Nations）countries, there are some articles on Japanese Imperial Household. People are interesting in the news of Japanese royal family. However, they do not discuss on the emperor's war responsibility and the emperor system itself, although most of these countries were occupied by Japan during the "Greater East Asia War" in 1941–45. This is the same trend not only in ASEAN countries but also in China and South Korea. When Akihito visited the Philippines as the crown prince in 1962 and as the emperor of Japan in 2016, Filipinos did not discuss on them. I tried to find the reasons in the English-language newspapers of the Philippines, but I could not find them.

This is a supplement for my book titled *Gurobaruka-suru Yasukuni Mondai: Tonan-Ajia kara no Toi*（*Globalizing Yasukuni Controversy: From the Perspectives of Southeast Asia*）published by Iwanami Shoten in 2018.

〈はじめに〉

本稿は，拙著『グローバル化する靖国問題―東南アジアからの問い』（岩波書店，2018 年）の第 3 章「1　2010 年の尖閣諸島沖での中国漁船衝突」「2　2012 年の尖閣諸島の日本「国有化」」「3　2013 年安倍首相の靖国神社参拝」「4　2015 年の平和安全法制成立」につづく「5　2016 年の天皇のフィリピン訪問」として準備したものである。だが，第 5 節として掲載することはできなかった。歴史問題に絡んでこなかったからである。

アセアン（東南アジア諸国連合）10ヶ国の英字新聞には，しばしば日本の皇室にかんする記事が掲載され，人びとの関心が高いことが感じられる。日中・日韓の歴史問題が表面化したときにも，とりあげられることがあったが，天皇の戦争責任や天皇制の存廃にかかわるようなものはあまりない。このことは，アセアン各国だけでなく，中国や韓国でも同じ傾向がみられる。なぜ，歴史問題に天皇・天皇制が絡んで議論されないのか，その一端を理解するために，現明仁天皇が 1962 年に皇太子として，また 2016 年に天皇として夫妻でフィリピンを訪問したときの状況を，フィリピンの英字新聞か

† 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

ら探ってみることにする。

2016年1月26日から30日まで，天皇・皇后が「フィリピンの招待により，国交正常化60周年に際し，国際親善のためご訪問」した。ふたりにとっては，54年ぶりのフィリピン訪問で，26日の「フィリピンご訪問ご出発に当たっての天皇陛下のおことば（東京国際空港）」および27日の「フィリピン大統領閣下主催晩餐会における天皇陛下のご答辞（大統領府）」［http://www.kunaicho.go.jp/page/okotoba/show/3#6, 2017年3月29日閲覧］でも，つぎのように1962年の訪問について触れている。まずは，62年の訪問について，語らねばならない。

平成28年1月26日（火）

フィリピンご訪問ご出発に当たっての天皇陛下のおことば（東京国際空港）

この度，フィリピン国大統領閣下からの御招待により，皇后と共に，同国を訪問いたします。

私どもは，ガルシア大統領が国賓として日本を御訪問になったことに対する答訪として，昭和37年，昭和天皇の名代として，フィリピンを訪問いたしました。それから54年，日・フィリピン国交正常化60周年に当たり，皇后と共に再び同国を訪れることをうれしく，感慨深く思っております。

フィリピンでは，先の戦争において，フィリピン人，米国人，日本人の多くの命が失われました。中でもマニラの市街戦においては，膨大な数に及ぶ無辜のフィリピン市民が犠牲になりました。私どもはこのことを常に心に置き，この度の訪問を果たしていきたいと思っています。

旅の終わりには，ルソン島東部のカリラヤの地で，フィリピン各地で戦没した私どもの同胞の霊を弔う碑に詣でます。

この度の訪問が，両国の相互理解と友好関係の更なる増進に資するよう深く願っております。

終わりに内閣総理大臣始め，この訪問に心を寄せられた多くの人々に深く感謝いたします。

平成28年1月27日（水）

フィリピン大統領閣下主催晩餐会における天皇陛下のご答辞（大統領府）

貴国と我が国との国交正常化60周年に当たり，大統領閣下の御招待によりここフィリピンの地を再び踏みますことは，皇后と私にとり，深い喜びと感慨を覚えるものであります。今夕は私どものために晩餐会を催され，大統領閣下から丁重な歓迎の言葉をいただき，心より感謝いたします。

私どもが初めて貴国を訪問いたしましたのは，1958年12月，ガルシア大統領御夫妻が国賓として我が国を御訪問になったことに対する，昭和天皇の名代としての答訪であり，今から54年前のことであります。1962年11月，マニラ空港に着陸した飛行機の機側に立ち，温顔で迎えて下さったマカパガル大統領御夫妻を始め，多くの貴国民から温かく迎えられたことは，私どもの心に今も深く残っております。この時，カヴィテにアギナルド将軍御夫妻をお訪ねし，将軍が1898年，フィリピンの独立を宣言されたバルコニーに将軍御夫妻と共に立ったことも，私どもの忘れ得ぬ思い出であります。

貴国と我が国の人々の間には，16世紀中頃から交易を通じて交流が行われ，マニラには日本

町もつくられました。しかし17世紀に入り，時の日本の政治を行っていた徳川幕府が鎖国令を出し，日本人の外国への渡航と，外国人の日本への入国を禁じたことから，両国の人々の交流はなくなりました。その後再び交流が行われるようになったのは，19世紀半ば，我が国が鎖国政策を改め，諸外国との間に国交を開くことになってからのことです。

当時貴国はスペインの支配下に置かれていましたが，その支配から脱するため，人々は身にかかる危険をも顧みず，独立を目指して活動していました。ホセ・リサールがその一人であり，武力でなく，文筆により独立への機運を盛り上げた人でありました。若き日に彼は日本に1か月半滞在し，日本への理解を培い，来る将来，両国が様々な交流や関係を持つであろうと書き残しています。リサールは，フィリピンの国民的英雄であるとともに，日比（にっぴ）両国の友好関係の先駆けとなった人物でもありました。

昨年私どもは，先の大戦が終わって70年の年を迎えました。この戦争においては，貴国の国内において日米両国間の熾烈（しれつ）な戦闘が行われ，このことにより貴国の多くの人が命を失い，傷つきました。このことは，私ども日本人が決して忘れてはならないことであり，この度の訪問においても，私どもはこのことを深く心に置き，旅の日々を過ごすつもりでいます。

貴国は今，閣下の英邁（えいまい）な御指導のもと，アジアの重要な核を成す一国として，堅実な発展を続けています。過ぐる年の初夏，閣下を国賓として我が国にお迎えできたことは，今も皇后と私の，うれしく楽しい思い出になっています。

この度の私どもの訪問が，両国国民の相互理解と友好の絆を一層強めることに資することを深く願い，ここに大統領閣下並びに御姉上の御健勝と，フィリピン国民の幸せを祈り，杯を挙げたいと思います。

1. 1962年皇太子として訪問

1962年11月5日から10日まで皇太子同妃は，フィリピンを「国際親善のためご訪問（ご名代）」した。ふたりの外国訪問は60年の日米修好100周年に際してアメリカ合衆国を訪問して以来，4度目であった。だが，アジア・太平洋戦争の激戦地フィリピンでは，反日感情が強く残り，懸念されるなかでの訪問だった。

出発に先立って，11月1日同行記者21人が「東宮御所の庭でご夫妻にお目にかかり，旅行の準備や心構えなどについてお話をうかがった」[「朝日新聞」1962年11月2日]。そのなかで，日比混血児や以前「日本に来て靖国神社を参拝した」戦争未亡人会の方に美智子妃が会い，「賠償の一部が未亡人会に割りあてられ」，「これがどうなっているかもお聞きしたい」と述べた。

また，フィリピンでは，3日フィリピン国立大学学生座談会を開催し，5人が出席した。まず最初に，「外国からきた人でフィリピンの青年にいちばん人気のあったのはだれか」という質問にたいして，異口同音に「去年の夏のマッカーサー」と答えた。1941年の日本軍フィリピン侵攻時のアメリカ極東軍（ユサフェUSAFFE: United States Army Forces in the Far East）最高司令官のマッカーサーDouglas MacArthur（1880–1964）である。教養学部4年で学生会会長のエリックは「戦争のことは過去のこととしてあきらめたい。日本を許しているということをこの機会に表明したい」，パラオ島からの留学生で医学部3年の中村敏男は「好奇心で迎えるかもしれないが，あまり関心はないようだ」

と述べた。教養学部4年のビセンテは「古い世代はアメリカにかわって日本の経済力がフィリピンを支配するのではないか，と心配している」と代弁した。

5日午後1時12分に羽田空港を出発するに際し，見送りにきた方々に，つぎのようなお礼のことばを皇太子は述べた。「このたび天皇陛下の名代としてフィリピン国を訪問し，延期中の責務を果す機会を得たことは喜びにたえません。わたくしたちはフィリピンとの親善関係の増進に役立つよう，できるだけ努力したいと思います。みなさんのお見送りに対して厚くお礼を申上げます」[「朝日新聞」1962年11月5日夕刊]。

午後4時半（日本時間5時半）に定刻通りマニラに到着した皇太子夫妻を空港で約7000，大統領官邸マラカニアン宮殿までの15キロの沿道には切れ目なく10万の市民が迎えた。マニラ空港では，つぎのような挨拶を述べた［「朝日新聞」1962年11月6日］。

> 私は一九五八年比国大頭領が日本を訪問された答礼のため，天皇の名代として当地にまいりました。大統領閣下の訪日は日本国民のフィリピン国民に対する友情を著しく強化いたしました。貴国の英雄の言葉に従えば「東洋の海の真珠」であるこの国を自分自身の目で見ることが私の宿願でありました。私はこの宿願がただいま実現いたしましたことを喜んでおります。
>
> さる二月，病気のため貴国訪問を延期し，みなさんに非常な迷惑をおかけいたしました。私は今回の訪問にさいし，大統領閣下およびフィリピン国民に対し日本国天皇および国民の祝福の気持をお伝えしたいと存じます。私は両国間に成長している友情をいっそう増進させたいと熱望いたしております。

皇太子夫妻が到着したとたん，「ミチコ」フィーバーがおこった。特別機の扉が開き，待ち構えていたフィリピン人カメラマンから出たことばが，「おお，ビューティフル」だった。警察・軍隊から動員された7000人が警備するなか，夫妻は沿道を埋めた人びとの心をとらえた。翌日，「独立の父」ホセ・リサール José Rizal（1861–96）の記念碑，無名戦士の墓に花輪を捧げ，病床の「祖国の父」アギナルド将軍 Emilio Aguinaldo（1869–1964）を訪ねるいっぽう，「ブラカン州ホロ（ママ）村［現在首都圏マニラ，ポロ］にある「日本人の墓」に係員を派遣，花輪をささげられた」[「朝日新聞」1962年11月6日]。7日に訪問したフィリピン大学では，デモが計画されていると報道されたが，なにもおこらなかった。

皇太子夫妻はマニラでの3日間の公式予定を終え，8日にマニラ北方250キロの避暑地バギオを訪れた。そこで，ふたりはバギオまでの道（ケノン道路またはベンゲット道路）は，「フィリピンや中国の労務者の手に負いかねて，明治三十六年に日本人二千人が工事をして，やっと完成したのだが，そのうち七百人が完成を待たずにマラリアで死んだ」という「虚像」を聞かされ，皇太子は記念碑の前で美智子妃の写真を撮った［「朝日新聞」1962年11月9日］。日本人労働者は植民地政府に雇われた一介の単純労働者にすぎなかったが，1930年代に日本人の優秀さを示す例として，勇敢さと死亡人数を誇張して伝え，戦後も修正されることはなかった［詳しくは，拙著『「ベンゲット移民」の虚像と実像』（1989年）を参照］。

帰国の日の10日の「朝日新聞」は，「微笑で開いた〝心のトビラ〟」「戦争の傷をこえて　お二人で

ファンづくり」「日比の未来は明るい」の見出しで，訪問を総括した。9 日午後，ケソン市での記者会見を前に，つぎのようなメッセージを発表した［「朝日新聞」1962 年 11 月 10 日］。

日比両国の友情のきずなは，さきに不幸にして中断されましたが，フィリピン国民からこのように暖かく迎えられて私たちはまことにしあわせでした。大統領閣下をはじめ各方面の方々にお目にかかり，またアギナルド将軍をおたずねしたことは私にとって感銘深いものがありました。フィリピン国立大学を訪問して若い世代の人々に会えたことは，私の本懐とするところであります。フィリピン政府および国民の一層の繁栄と福祉を祈ります。

10 日午後 3 時 50 分に羽田空港に帰国した皇太子は，つぎのメッセージを読みあげた［「朝日新聞」1962 年 11 月 11 日］。

わたくしは天皇陛下の名代としてフィリピン国を訪問してただいま帰国しました。フィリピンではマカパガル大統領閣下の特別なご配慮のもとに心あたたまる厚遇を受けました。

また旅行の期間はきわめて短時日でマニラ周辺ならびにバギオに限られましたが，いたるところで官民各層の盛大な歓迎を受け，快い交歓の機会を得ましたことはわたくしの最大の喜びでありました。これは，さきに不幸にも一時中断された日比友好関係が旧に復し，フィリピン国民のわが国に対する理解と友情が深められつつあるしるしであると信じます。

わたくしたちは，このたびの訪問で不十分ではありましたが，フィリピン国民が国家の建設繁栄と国民生活の向上発展のために真剣な努力を続けている様子を見聞して，まことに感銘を深くいたしました。わたくしたちのこのたびの訪問が少しでも両国相互の親善のために寄与することができたとすれば望外の喜びであります。

ここにあらためてフィリピン大統領閣下ならびに国民各位のご好意に対し深く感謝いたします。

最後に，このたびの旅行について心を寄せられたわが国の皆さんに対し厚くお礼を申しのべます。

このメッセージの下に「近い将来に解決　日比通商条約を検討中　比大統領記者会見」とあり，またその前日には「もし美智子妃がたのむなら，通商条約も批准してあげよう」と言ったフィリピンの国会議員もいたと報じた［「朝日新聞」1962 年 11 月 10 日］が，1960 年 12 月 10 日に調印された日比友好通商航海条約は，それから 11 年後の 73 年 12 月 27 日，マルコス戒厳令体制下の大統領権限で批准されるのを待たねばならなかった。「日比の未来は明るい」というのは早計であり，フィリピン人の根強い反日感情と日本人にたいする不信を変えることはなかった。

フィリピンの *The Manila Times* では，訪問前日の 1962 年 11 月 4 日に 1 面で皇太子アキヒトと平民の妻ミチコが，翌 5 日午後 4 時 30 分にマニラ国際空港に到着し，5 日間滞在すると報じた。アキヒトとミチコは，西洋音楽，美術，テニスなど多くの共通の文化，スポーツに関心があると紹介した。また，日本人ハンセン病患者を受け入れたりした 16〜17 世紀の日本とフィリピンの関係史が語られ，

日本の賠償金が有効に使われている記事を掲載した。

フィリピン訪問予定当日の5日の1面トップには，ふたりの大きな写真が掲載された。マカパガル大統領 Diosdado Macapagal（1910–97，在任 1961–65）夫妻が空港で迎え，21発の祝砲が打たれることを報じた後，歓迎する理由を4つあげた：1. 皇太子・皇太子妃は先の戦争とは無関係であること，2. 東洋と西洋の両方の伝統をもつ現代の日本を代表していること，3. 皇太子アキヒトが平民の妻を迎えたことを世界が賞賛したこと，4. 今後の日本との関係とくに1974年の比米通商協定満期失効後の経済関係が重要であること。社説では，比日通商航海条約の批准を期待し，平和と友好だけでなくスペイン植民地期以来の歴史的密接な関係を重視した。

6日の紙面は，フィリピン・日本関係の「新時代」の夜明けを感じさせるに充分な記事であふれた。記事の冒頭の「平民の妻皇太子妃ミチコ」に，「チャーミング」ということばが付け加わった。着物姿のミチコにフィリピンの人びとは魅了され，「日本への悪感情は吹き飛んだ」。空港に集まった5000人（「朝日新聞」では空港屋上に約7000人と報道）が「マブーハイ（バンザイ）」と歓迎の声をあげ，大統領官邸のマラカニアン宮殿までの沿道にも数千人（「朝日新聞」では10万人と報道）が集まったが，心配されたことはなにもおこらなかった，と報じた。

その心配されたことについて，バレンシア Teodoro F. Valencia は「一杯のコーヒーの向こうに」というコラム欄で，6日と7日連続，つぎのように記した。もし，日本がフィリピンとの友好を回復したいのなら，まず日本占領中にフィリピンでおこった事実を日本人に知らせることだ。日本人の若者は，なぜアジアの人びとが反日感情を懐いているのか理解していない。戦後17年経ってでたこの意見は，半世紀後の中国や韓国で歴史問題がおこるたびにでてくるものと同じである。このコラムから，戦争中日本の被害を受けた国の人びとのいらだちが伝わってくる。

6日の *The Manila Times* のビジネス面は，フィリピンと日本の経済的発展を期待した記事が延々とつづき，1964年に開催が決まった東京オリンピックの記事で締めくくった。

5日の到着から10日の帰国翌日まで，連日1面トップに大きな写真とともにスケジュールを刻一刻と伝え，ふたりの一挙手一投足を追った記事を掲載した。8日の赤ん坊を抱いたミチコの写真はひときわ印象的で，「妖精のような教母」というキャプションが添えられた。

マニラでの公式行事を終え，8日に汽車と車で6時間ほどのルソン島北部山岳地帯の夏の首都バギオに向かった。1面トップの記事は，バギオが日本軍の最終根拠地のひとつであったという説明ではじまっている。7日に訪れたフィリピン大学では計画されていた学生デモは回避されたが，バギオでは小規模なデモがおこり，突然40歳代の女性が生徒たちの群れをかき分けて旗をとって破り捨てるということがおこった。だが，全体として，平穏に5日間の訪問を終えた。

11日の *The Manila Times* の社説は，「皇太子訪問でフィリピン・日本関係強化」という題で，「もっとも成功した公式訪問」のひとつであると高く評価した。2日連続苦言を呈したバレンシアも同じコラムで「アキヒトの公式訪問は予想もしなかった成功」と題して，だれも予想できない歓迎ぶりだったと振り返った。だが，残念だったのは，フィリピン人が心の奥深くで日本人，とくに帝国皇室 Imperial Household に憎しみを懐いていることを日本人に理解してもらえなかったことだと述べ，フィリピン人のホスピタリティのお蔭で憎しみが一時的に忘れられたにすぎないと解釈した。

若い皇太子と平民出身のチャーミングな同妃のカップルは，南部のイスラーム地域をのぞいて王族

を知らないフィリピン人にとって新鮮で高貴なものにみえ，フィリピン人に多大の犠牲と被害をもたらした戦争と結びつかなかった。だが，フィリピン人は，日本と戦争の関係を一瞬忘れたにすぎなかった。

12 日の 1 面の最下段に，「フィリピンと日本との密接な関係をいかに促進するか」という論文コンテストの記事が載った。*The Manila Times* と日本大使館の共催でおこなわれたコンテストの結果を探し出すことはできなかったが，どのような論文が集まり，受賞論文はどのような内容だったのか，興味あるところである。

2. 2016 年天皇として訪問

2016 年 1 月 26 日から 30 日までの天皇・皇后のフィリピン訪問を前に，フィリピン大学教授ホセ Ricardo T. Jose は，朝日新聞の取材にたいして，つぎのように答えた［「朝日新聞」2016 年 1 月 26 日］。

> 今回の訪問が実現した背景として，①両陛下の第 2 次世界大戦の犠牲者への深い思い②祖父や母の代から続くアキノ大統領と日本との関係③中国の台頭でアキノ・安倍両政権の緊密さが増していること―の 3 点があげられる。
>
> フィリピンでは，約 52 万人の日本兵だけでなく，約 111 万人といわれるフィリピン人も亡くなっている。フィリピン国民にとっては，両陛下が国立墓地を訪れ，無名戦士を慰霊する意義が大きい。
>
> 54 年前の 1962 年，お二人が皇太子ご夫妻として訪れた時，フィリピンではまだ反日感情が強かった。だが，若々しいお二人の姿に「新しい日本」を感じ，その後の東京五輪と合わせてイメージが好転した。日本製の車や電化製品が国民を魅了し，多額の援助で「恨み」は封印された。
>
> だが，性的な暴力を受けた女性や，残虐な行為を受けた人々は日本を許せず，日本政府による「公的な謝罪」を求めている。
>
> 今回の訪問は，日比関係の新たなステップととらえたい。少子高齢化の日本にとって，平均年齢が若く経済成長が著しいフィリピンは，看護師などの労働力の供給源であり，魅力的な市場だ。対等な関係の構築には，負の歴史にもう一度目を向ける必要がある。
>
> 安倍政権の言う「未来志向」も重要だが，過去も忘れてはいけない。両陛下が戦後 70 年の翌年にフィリピンを訪問先に選んだ意図も，そこにあるのではないだろうか。

26 日午後にマニラに到着した天皇・皇后は，27 日にマラカニアン宮殿での歓迎式典に出席し，午後フィリピン独立運動の英雄ホセ・リサールの記念碑に供花，フィリピンの「無名戦士の墓」を訪れて追悼し，28 日に戦後取り残された日系人約 100 人と会見，国交正常化前の 1953 年に 100 人余の日本人戦犯を特赦したキリノ大統領 Elpidio Quirino（1890–1956，在任 1948–53）の孫娘と懇談，29 日に日本政府が建立した「比島戦没者の碑」に詣でた。

なお，2016 年 6 月 18 日，ホセ・リサール像がある日比谷公園で，キリノ大統領の顕彰碑除幕式が開催された。建立に至った経緯は，日本の外務省のホームページで，つぎのように説明された［http://

www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_003390.html　2017年5月5日閲覧]。

1　1953年6月，フィリピンのモンテンルパ刑務所に服役していた105名の日本人戦犯は，キリノ大統領（当時）の恩赦により，全員釈放されました。キリノ大統領は，夫人と子供3人を太平洋戦争末期に失いましたが，「自分の子供や国民に，我々の友となり，我が国に末永く恩恵をもたらすであろう日本人に対する憎悪の念を残さないために，これを行うのである。」との声明を発出しました。戦後の厳しい対日感情の中で，批判を恐れずに行われたこの恩赦は，1956年7月の日比国交正常化に大きく寄与し，今日の日比友好の礎となりました。

2　この顕彰碑は，1953年7月にキリノ大統領（当時）に感謝する「国民感謝大会」が開催された日比谷公会堂の近くに，在京フィリピン大使館が建立するものです。また，日本フィリピン友好議員連盟，一般財団法人フィリピン協会，日比経済委員会（三菱商事，丸紅，日産自動車，住友金属鉱山，大和ハウス工業，全日本空輸等），島根県公益財団法人加納美術振興財団，在日フィリピン商工会議所が建立のための費用を寄付しました。

3　除幕式には，キリノ元大統領のご親族，ドリロン・フィリピン上院議長，アンガラ元フィリピン上院議長が出席されるほか，日本側からも高村正彦自由民主党副総裁，小坂憲次日比友好議員連盟会長，山田美樹外務大臣政務官及び寄付団体等から関係者が出席します。

（参考）エルピディオ・キリノ元フィリピン大統領

1890年～1956年。大統領在任は1948年4月から1953年12月まで。大統領在任中の1953年6月に，フィリピンのモンテンルパ刑務所に服役していた105名の日本人戦犯に対する恩赦を決定した。

27日夜の晩餐会で，ベニグノ・アキノ3世大統領Benigno Simeon Cojuanco Aquino III（1960–，在任2010–16）は，つぎのようなスピーチをおこなった［「朝日新聞」デジタル版，2016年1月27日］。

天皇皇后両陛下を再びフィリピン共和国にお迎えできたことは，我が国民にとってこの上ない光栄でございます。今回のご訪問は，両国の国交正常化60周年を迎える誠に喜ばしい年に実現されましたが，両陛下がこのたび我が国にお越しくださったという事実そのものが，両国間の友好関係の深さを明確に物語っております。

今をさかのぼること数十年，1962年に天皇皇后両陛下は初めて我が国にお越しくださいました。両陛下は，フィリピン国民が過去に経験した痛みを思うと自身をどのように迎えてくれるのか不安であった，と私にお話しくださいました。ところが，当時のディオスダド・マカパガル大統領や多くの国民が歓迎する姿を目の当たりにされ，こうしたご不安は杞憂（きゆう）に終わったのです。数十年前のこのご訪問の際に数多くの心温まる思い出を持ち帰られたように，今回ご帰国の途に就かれる際にも，フィリピン国民の抱く敬愛の念と歓迎の心に再度触れられ，前回にも勝るほどのよい思い出を携えていただきたい，これが我が国民一同の願いです。

私が天皇皇后両陛下にお目にかかるのはこれが4度目となります。最初は1986年に私の母の

日本訪問に随行したとき，その後は私が大統領として貴国を訪れた際のことです。お目にかかるたびに感銘を受けるのは，両陛下が示される飾り気のなさ，ご誠実さ，そして優美さです。両陛下が今日までいかにして責務や義務を果たされ，多大な犠牲を払われてきたのかを思うと，誰もが驚嘆せずにはいられません。そしてそのすべては，さまざまな関係を立て直してさらによいものにしていきたいという，ご生涯をかけた献身の一環を成すものなのです。

貴国の象徴として，善意を体現する存在として，天皇皇后両陛下がいかなる困難を担われてきたのか，私には想像することしかできません。私が大統領の座に就く際には，任期中に限っては自身を犠牲にしなければならないということを十分承知して，国民から負託されたこの職務を引き受けました。その私が両陛下にお会いして実感し，畏敬（いけい）の念を抱いたのは，両陛下は生まれながらにしてこうした重荷を担い，両国の歴史に影を落とした時期に他者が下した決断の重みを背負ってこられねばならなかったということです。

しかし，こうした歴史の上に，両国は以前よりもはるかに揺るぎない関係を築いてきました。貴国は堅実で有能かつ信頼できるパートナーとして，今日まで我が国民の発展を後押ししてくださっています。ここでその一端をご紹介したいと存じます。2014 年，貴国は我が国にとって最大の貿易相手国であり，この年に実施された我が国への政府開発援助の最大供与国でもあって，さらには我が国投資促進機関認可ベースの対内直接投資額においても 1 位の座を占めています。貴国はまた，ミンダナオの和平プロセスや開発に加え，我が国の海上能力や災害管理能力の強化をも支える重要なパートナーであり，アジアにおける法の支配を推進する力強い同盟国でもあります。ここに挙げたものだけでなく，貴国から受けたすべての恩恵に対し，フィリピン国民を代表して，貴国の言葉で「どうもありがとうございます」と申し上げます。

天皇皇后両陛下，今回のご訪問は，両陛下の人生のこの時点で我が国にお越しくださるご選択をなされたことを思うと，いっそう意義深いものとなります。1960 年代にお越しいただいた際には，旅の所要時間は今回より長かったかもしれませんが，両陛下のお身体（からだ）へのご負担は今回よりも軽かったのではないかと存じます。今宵（こよい），あまねく平和を実現する敬愛の象徴たる両陛下にご臨席たまわったことを心から名誉に思うとともに，これは全出席者の総意でもあると申し添えます。

ここで，皆様とともに乾杯をいたしたいと存じます。

天皇皇后両陛下のご多幸とご健勝をお祈りし，両国民の連帯が，将来世代にわたって両国に繁栄をもたらすことを願い，そして，両国の戦略的パートナーシップがアジア全域の平和，安定，発展に向けた確固たる礎となることを願って。

27 日，天皇・皇后のフィリピン訪問にあわせて，「旧日本軍の慰安婦にされた」と主張する女性とその支援者が，日本政府に「公式な謝罪と補償を」と訴え，抗議行動をおこなった。元慰安婦の支援団体「リラ・ピリピーナ」には一時 174 人の元慰安婦が登録していたが，104 人が死去した。ベニグノ・アキノ 3 世大統領は，この慰安婦問題について「日本は義務を果たし終えている」という立場をとっていた［「朝日新聞」2016 年 1 月 27 日夕刊］。

フィリピン大学教授ホセが，今回の訪問が実現した背景として 2 番目にあげた「祖父や母の代から

続くアキノ大統領と日本との関係」について，「朝日新聞」は帰国の日の 30 日の特集で，つぎのようにとりあげた。

……86 年 11 月，コラソン・アキノ大統領来日の時だ。マルコス独裁体制を倒した「ピープルパワー革命」で大統領に就任して間もなくだった。大統領との会見で昭和天皇が第二次世界大戦に関し何度も謝罪したとの情報が，フィリピン側から流れたのである。しかし日本側は全面否定。「昭和天皇実録」にも記録はない。

ただ一人会見に同席していた安倍勲式部官長は，この時の天皇と大統領のやりとりを退職後に随筆に書き残している（昭和塾塾友会「回想の昭和塾」所収）。

コラソン大統領「亡夫ベニグノの父はベニグノ・アキノと申しまして，先の大戦中，日本を訪問し，陛下におめにかかったと申しておりました」

昭和天皇「そうでしたね。いろいろと迷惑をかけました」

大統領「いえ，そのことはお互いに忘れることとしましょう。父も亡夫も，恨みごとなど全然いっておりませんでした。戦争は，誰にとってもむごいものです。だから，私共は，あくまで平和を求めなければならないと思います」

天皇「フィリピンの人達（たち）には，ほんとに迷惑をかけました。残念でした」

コラソン氏の義父ベニグノ・アキノ・シニア下院議長は日本の軍政に協力し，東条内閣の大東亜会議にも参加した。米軍の反攻で日本に落ち延びたが，戦犯として巣鴨拘置所に収容され，母国で「対日協力者」として裁判にかけられるなどつらい経験を味わった。

昭和天皇の「謝罪」にコラソン大統領の目には光るものがあり，後々まで「ほんとに優しい親切な方」と繰り返した。昭和天皇の大喪，現天皇の即位の礼にも自ら参列した。

そのコラソン大統領の国賓行事の時，現天皇陛下は皇太子として，また息子のベニグノ・アキノ 3 世現大統領も随員として同席していた。コラソン大統領と現陛下も，現大統領と皇太子さまも同年生まれ。戦争と平和の日比関係史の裏には親子孫 3 代の縁（えにし）も織り込まれている。

そして昨年 6 月―。現大統領の歓迎晩餐会で，天皇陛下は戦争に正面から踏み込む「おことば」を述べた。

「先の大戦においては，日米間の熾烈（しれつ）な戦闘が貴国の国内で行われ，この戦いにより，多くの貴国民の命が失われました」

「痛恨」という最大級に近い表現も盛り込まれた。象徴天皇が過去の戦争に触れるのは国家間関係として 1 回で十分という長年の縛りを解く異例のことであり，宮内庁関係者の間には一時慎重論も出たが，戦後 70 年の節目として，ガルシア大統領に対して以来 57 年ぶりに天皇が「戦争」に言及した。

Philippine Daily Inquirer は，連日天皇・皇后のフィリピンでの行事を伝えた。夫妻がマニラに到着した翌日 27 日，1 面中央に宿泊先のホテルで日本小学校の生徒に迎えられた様子を伝える写真を掲載し，フィリピン訪問は日比国交回復 60 年を記念するとともに，「慰霊の旅」であることを伝え，つぎのように報じた。夫妻は，1994 年に硫黄島，2005 年にサイパン，15 年にパラオを訪問し，敵味方，

将兵・民間人の区別なく戦争犠牲者を追悼した。このことは，海外での日本の軍事的役割を拡大させる安全保障関連法を通過させた安倍晋三首相（1954–，在任 2006–07，2012–）の軍事化政策と矛盾し，それに対抗しているようにもみえる。また，日本とフィリピンとの関係は，戦後の日本の多額の援助で劇的に好転し，近年は中国の軍事的脅威の高まりから防衛で連帯を強化し，日本から軍事用機器や技術の提供を受けている。

28 日は，アキヒトが慰霊にこだわる理由や 1962 年の最初の訪問のことなどについて，つぎのような説明や解説をした。アキヒトはアメリカ軍の空襲から逃れるために 11 歳で疎開し，敗戦後焼け野原となった東京を見て，戦争の悲惨さを実感し，若者に戦争の恐ろしさを伝え，近隣諸国との和解を進めなければならないとつとめてきた。天皇は憲法で政治的影響力はまったくないとされ，高島肇久（はつひさ）元外務報道官（2002–05 年）は，アキヒトの平和主義は安倍政権の政策を否定するものではないと述べた。また，最初の訪問のときはひじょうに心配したが，空港でマカパガル大統領夫妻の歓迎を受け，どこでもフィリピン民衆に暖かく迎えられ，ひじょうに印象深いものになり，「両陛下」は両国の関係が深まることを心から願っていると説明した。ベニグノ・アキノ 3 世大統領との会談では，交通渋滞の問題と日本製自動車の氾濫の関係や米を輸入していることなどが話題になった。

29 日は，1 面トップに前日の晩餐会の写真を掲載し，その下に日本が鉄道建設に援助する記事が組まれ「夢の計画」と説明した。天皇・皇后が訪れる予定の「比島戦没者の碑」のある付近では，泣く児を黙らせるために「日本人が来た！」と言っていたことや，戦犯で絞首刑された山下奉文（ともゆき）や本間正晴の遺骨や慰霊碑のエピソードを紹介した。そして，半分以上が広告だが 1 面全部を割いて，謝罪と補償を求める元従軍慰安婦とそれを支持する団体の記事を掲載した。

30 日は，29 日に訪問した国際稲研究所での写真を 1 面に掲載し，日本政府が 1973 年に建立した「比島戦没者の碑」の前で追悼する姿は 13 面にして目立たなくした。帰国翌日の 31 日には，天皇は反戦を強く訴えたが，公的には日本軍が戦争中に犯した虐殺にたいして謝罪しなかった，という記事を掲載した。そして，1 週間後の 2 月 5 日に抗日ゲリラがいまも年金をめぐってフィリピン政府と「戦っている」という記事を掲載した。

天皇・皇后の 5 日間の訪問中，フィリピン各紙は多くのページを割いて報道した。その記事の内容は繰り返しが多く，だんだんどう報道していいのかわからなくなったという印象を受ける。フィリピンに多くの犠牲と甚大な被害をもたらした戦争は，天皇ヒロヒトの名でおこなわれ，その息子のアキヒトが誠意をもってフィリピン人を含む戦死者の慰霊と追悼に来た。日本の援助と投資はフィリピンに不可欠で，さらに中国の台頭にたいして 2011 年以降防衛上日本との連帯が重要になってきており，日本との関係を悪化させるようなことはしないほうがいい。だが，元従軍慰安婦が公式の謝罪と補償を求めていることも理解できる。天皇・皇后の誠意と人柄には魅力を感じるが，政治的影響力はなく，結局謝罪はしなかった。このような報道から，フィリピン人の日本人にたいする戸惑いのようなものを感じる。

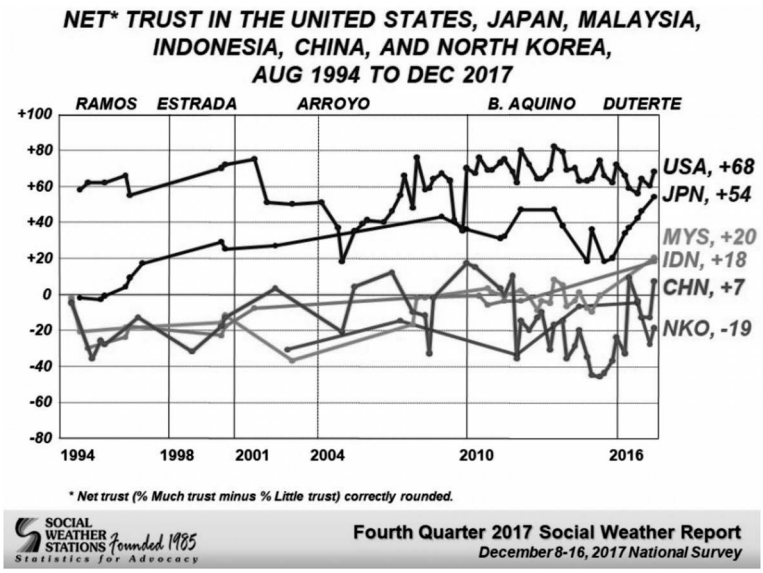
2016 年 10 月 18 日（日本では NHK BS1，19 日午前 4 時 34 分放送）の ABS-CBN で，Social Weather Stations SURVEY による 9 月のフィリピン人の国別信頼度（「大いに信頼する much trust」から「あまり信頼しない little trust」を引いた数値）調査の結果が放送された。トップは，アメリカの＋66 で，以下，オーストラリア＋47，日本＋34，ノルウェイ＋16，オランダ＋14，台湾＋3 で，中国は－33

の最下位だった。アメリカは6月の＋72から6ポイント，中国は－24から9ポイント下がった。この調査は9月24日から27日に全国1200人に直接会っておこなわれた。日本は，この調査が最初におこなわれた1994年にはマイナス2であったが，96年にプラスに転じ，その後上昇して2013年に＋47になったが，15年に＋18に低下し，前回の6月には＋20であった［http://www.sws.org.ph/swsmain/artcldisppage/?artcsyscode＝ART-20170524110630 2017年6月30日閲覧］。この調査から，1994年以来フィリピン人の信頼度は大きく好転したことがわかるが，15年12月の＋18から16年3月の＋20とあまり変わっていない。16年1月の天皇のフィリピン訪問の影響は，この数字に表れていないことがわかる。最新の17年12月の調査では，日本は＋54になり，アメリカは＋68で相変わらずもっとも信頼度が高い。ドゥテルテ大統領 Rodrigo Roa Duterte（1945–，在任2016–）の反米・嫌米発言はあまり影響を受けていないが，大統領の発言を否定する意見も聞かれない。中国は，15年9月の－46から16年12月に＋9に上昇したが，17年9月に－13に下落，同年12月に＋7に20ポイント上昇した［https://www.sws.org.ph/swsmain/artcldisppage/?artcsyscode=ART-20180228140019 2018年5月3日閲覧］。1998年までの日本のイメージについては，ユー–リベラ Helen Yu-Rivera の2冊の本を参照［Yu-Rivera, 2005, 2009］。

なお，フィリピンで戦争の記憶が若い世代に着実に引き継がれていることは，拙著『戦争の記憶を歩く　東南アジアのいま』（2007年）の英語訳 *A Walk Through War Memories in Southeast Asia*（2010年）を読んだアテネオ・デ・マニラ大学学生51人の感想文から明らかになった。詳しくは，拙稿「戦争認識のすれ違い―日本人学生とフィリピン人学生」（2011年）を参照。

1962年の最初の訪問のとき，ほかの東南アジアの国ぐにの英字新聞でそれを報じたものを見つけることはできなかった。だが，今回の訪問は各国がそれぞれ大きく報道した。

シンガポールの *The Straits Times* では，天皇・皇后がマニラに到着した翌日の27日，飛行機を降り，出迎えたベニグノ・アキノ3世大統領と並んで歩く大きな写真とともに，第二次世界大戦中に日



本が占領した国に天皇が訪問したのは初めてのことで［1991年にタイ（戦争中日本と同盟関係），マレーシア，インドネシア，2006年にシンガポール，タイ訪問（マレーシアお立ち寄り）］，フィリピンは戦後経済援助などを通して日本との関係を劇的に好転させ，経済と防衛で密接な関係にあり，懸念材料は従軍慰安婦問題くらいだと報じた。そして，アキヒト天皇がかの女らに会えば，もっと意味のあるものになるだろうと結んだ。翌28日にも大きな写真とともに，フィリピン訪問中の夫妻の行動を報じ，若い世代に戦争の悲惨さを伝え，近隣諸国との和解をすすめることを，アキヒト天皇が願っていると伝えた。約200人の元従軍慰安婦とその支持者が宮殿の外でデモしているとも伝えた。30日には，「比島戦没者の碑」で深々と頭を下げる大きな写真を掲載した。そして，31日にマニラのフィリピン通信員が，つぎのように総括した。中国と東シナ海で領有権問題のある日本との関係をフィリピンは重視しており，天皇の訪問で信頼関係を増した。フィリピンの若い世代は「マンガ，渋谷ファッション，寿司」など日本の文化に親しんでいるが，左翼のなかには安倍首相による日本の再軍事化を懸念している者もいる。天皇の5日間のフィリピンの訪問中，前後を含めて，従軍慰安婦と南シナ海の記事が目立った。天皇は憲法で政治的影響力はないとされながらも，時事問題と結びつけて報道した。

そのほかの東南アジア諸国は，フランス通信，ロイター，Kyodo Newsの記事を掲載した。マレーシアの *New Straits Times* では，出発の前日の25日に「天皇の明日からの親善の旅は，安倍の戦後観と対立する」という副題で，フィリピン訪問をフランス通信東京発の記事で報じた。到着翌日の27日は，インドネシアの *The Jakarta Post*，ベトナムの *Viet Nam News* にも掲載されたフランス通信マニラ発の記事を掲載した。28日はロイターマニラ発の記事で，フィリピンの無名戦士の墓にお辞儀する写真を掲載し，天皇・皇后はフィリピンに「和解」のための慰霊に訪れたこと，フィリピンにも従軍慰安婦問題があることを伝えた。フィリピン側の無名戦士の墓訪問とのバランスをとるかのように，30日に「比島戦没者の碑」に頭を下げるふたりの写真を掲載した。写真を比べると，とくにミチコ妃は後者で深く頭を下げている。

タイの *The Nation* はロイターマニラ発の記事を掲載し，*New Straits Times* 同様，アキヒトが日本の若者に戦争の記憶を伝えたいことを強調し，日本兵の遺骨収集と従軍慰安婦の問題が安倍政権に残されていると報じた。ミャンマーの *The Global New Light of Myanmar* では，1月28日にアキヒト天皇とベニグノ・アキノ3世大統領がにこやかに握手する写真とともに，日比双方の戦争犠牲者を慰霊すること，従軍慰安婦とその支持者200名が日本政府と天皇の公的謝罪を求めてデモしていることを伝えるKyodo Newsの記事を掲載した。カンボジアの *The Cambodia Daily* は，帰国後の2月1日に，フィリピンを公式訪問した天皇・皇后がマニラの国際空港で帰国便のタラップから手を振る写真を掲載しただけで，記事はない。

〈おわりに〉

1962年のフィリピン訪問では，対人関係重視からアキヒト皇太子夫妻の人柄をフィリピン人が受け入れたから歓迎されたのであろう。逆に，このとき夫妻のなにげない言動でフィリピン人を傷つけていたなら，取り返しのつかないことになっていたかもしれない。いっぽうで，この対人関係重視はその場かぎりのもので，ほかに影響もしなければ，長つづきもしないものと考えていいだろう。事実，

このときの予想外の成功は，60 年に調印された比日通商航海条約の批准に結びつかなかったし（マルコス戒厳令下の 1973 年に批准），2016 年の天皇・皇后の訪問は日本の信頼度の上昇にあまり貢献しなかった［佐藤，2007 年，40–46 頁］。

50 万を超える日本兵と 100 万人を超えるとされるフィリピン人犠牲者は，アキヒト天皇の父のヒロヒト天皇の名でおこなわれた戦争の結果である。だが，1962 年に皇太子夫妻として訪問したときも 2016 年の天皇・皇后として訪問したときも，日本の皇室の戦争責任は問われなかった。それをキリスト教精神に基づく寛大さという理由だけで理解できないのは，日本人もフィリピン人も同じだろう。天皇・天皇制が歴史問題と絡まなかった理由を明らかにすることはできなかった。ただ，天皇の平和主義に基づく慰霊の旅を純粋に受け入れ，それが安倍政権の再軍事化と矛盾することを，フィリピン人だけでなく東南アジアの人びとも外国通信社の記事などを通して理解していたことがうかがえた。

参考文献

浅見雅男『皇族と帝国陸海軍』文春新書，2010 年，294 頁。
小田部雄次『皇族―天皇家の近現代史』中公新書，2009 年，458 頁。
河西秀哉『明仁天皇と戦後日本』洋泉社歴史新書，2016 年，191 頁。
佐藤考一『皇室外交とアジア』平凡社新書，2007 年，228 頁。
西川恵『知られざる皇室外交』角川新書，2016 年，303 頁。
早瀬晋三『「ベンゲット移民」の虚像と実像―近代日本・東南アジア関係史の一考察』同文舘，1989 年，292 頁。
早瀬晋三『戦争の記憶を歩く　東南アジアのいま』岩波書店，2007 年（2012 年 3 刷増補），220 頁；英語訳：*A Walk Through War Memories in Southeast Asia*, Quezon City: New Day Publishers, 2010.
早瀬晋三「戦争認識のすれ違い―日本人学生とフィリピン人学生」『大学教育』（大阪市立大学）第 9 巻，第 1 号（2011 年 9 月），25–32 頁。
山本雅人『天皇陛下の全仕事』講談社現代新書，2009 年，364 頁。
吉田裕・瀬畑源・河西秀哉編『平成の天皇制とは何か―制度と個人のはざまで』2017 年，265 頁。
Yu-Rivera, Helen, *Patterns of Continuity and Change: Imaging the Japanese in Philippine Editorial Cartoons, 1930–1941 and 1946–1956*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2005, 276 p.
Yu-Rivera, Helen, *A Satire of Two Nations: Exploring Images of the Japanese in Philippine Political Cartoons*, Quezon City: The University of the Philippines Press, 2009, 342 p.